

学習院職員の永井崇匡さんが、 東京2020パラリンピックに出場しました！



東京2020 パラリンピック 競技大会

大会期間

令和3(2021)年
8月24日～9月5日

参加国・地域

162(難民選手団含む)

開催地

日本・東京 他

柔道

永井崇匡

男子73kg級 7位

初戦でアルゼンチン代表のラミレス選手と対戦する永井さん。開始39秒で見事な一本勝ちを収めました＝8月28日、東京・日本武道館

令和3(2021)年8月24日～9月5日に開催された東京2020パラリンピックに、学習院大学卒業生で、現在、学習院職員の永井崇匡さんが、視覚障害者柔道男子73kg級日本代表選手として出場し、熱戦を繰り広げました。

初めて臨んだパラリンピック、永井さんは初戦を鮮やかな巴投げによる一本で完勝。準々決勝で世界ランク3位の強豪に惜しくも敗れましたが、パラアスリート最高峰の舞台で7位入賞の成績を収める大健闘を見せました。

永井さんは群馬県中之条町出身。1歳の頃、網膜芽細胞腫で全盲となり、運動量不足を心配した両親の勧めで小学1年から柔道を始めました。高校入学後にめきめき実力を伸ばし、数学教師を志して入学した学習院大学でも柔道部に所属。平成28(2016)年には全日本視覚障害者柔道大会で2連覇を達成し、平成30(2018)年にインドネシアで開催されたアジアパラ競技大会では銅メダルに輝きました。平成31(2019)年4月に学校法人学習院に入職し、

誰もが生き生きと活躍できる「共生社会」の実現に取り組む学習院のサポートを受けながら、学内の充実した練習環境で日々稽古に励んできました。

子どもの頃からの夢だったという今回のパラリンピックでは、目標としていたメダルには手が届きませんでした。試合後は「悔しい気持ちはあるけれど、この結果を受け入れて今後活かしていきたい」と力強くコメント。努力と情熱を傾けて世界の頂点に挑んだ貴重な経験を、自らの人生の力にしていく決意を語ってくれました。

永井さんのパラリンピック出場は、学習院の誇りであると同時に、多くの人々に勇気と感動を与えたことでしょう。

Profile 永井 崇匡 (ながい たかまさ)

平成7(1995)年群馬県生まれ。平成31(2019)年3月学習院大学理学部数学科卒業。同年4月学校法人学習院に入職。主な戦績は、平成27(2015)、平成28(2016)、令和元(2019)年、全日本視覚障害者柔道大会優勝、平成29(2017)年ウズベキスタンワールドカップ9位、平成30(2018)年アジアパラ競技大会3位、令和元(2019)年IBSAアジアオセアニア選手権大会3位 ほか。

写真提供：時事

学習院の 名 情 景

第9回 北別館(旧図書館)

キャンパスに遺る馴染み深い場所を紹介するシリーズ。第9回は、明治末期に目白キャンパスの中心的な施設として建てられた「北別館(旧図書館)」です。築後一世紀以上が過ぎた今も竣工当時の清楚なたたずまいを保ち、人々を魅了し続けています。



大正4(1915)年撮影の全景。今はない煉瓦造3階建の書庫が奥に見える

目白キャンパスには思わず写真を撮りたくなるような趣のある場所が点在していますが、中でも長い歴史と美しい外観・意匠を持ち、昔から多くの記念写真撮影の舞台にも選ばれてきた建物が北別館(旧図書館)です。

竣工は明治42(1909)年。設計は数多くの旧制中学・高校の校舎をはじめ、学習院目白キャンパス開校時のすべての建物も手掛けた久留正道(安政2《1855》～大正3《1914》年)。校舎設計の手引きとなる『学校建築図説明及設計大要』を著したことで知られる、明治期の学校建築の第一人者です。

建物が位置するのは、本館や教室棟が集まる教育施設ゾーンと、寄宿舎や官舎からなる居住施設ゾーンを繋ぐ場所。図書館が学生の教育とともに余暇など生活の充実にも重要な役割を果たすことを考慮して配置されました。

竣工時の平面構成は、大きな閲覧室の左右に北棟と南棟を配し、中央奥に煉瓦造の書庫を設けたシンメトリー形状。正面玄関のほか建物両翼の付け根にも出入口があり、目的の部屋へスムーズに人が流れる設計です。昭和53(1978)年に30mほど曳家された際に北棟と書庫が取り壊さ



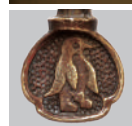
竣工時は翼を広げたような形状だった
『学習院 目白の学び舎』(丸善プラネット 2010)より転載

れ、現在はL字型になっています。

外観で目を引くのは急勾配の大きな切妻屋根。板張りの外壁は明るいグレーにペイントされ、建物全体に爽やかで軽快な印象を与えています。また、閲覧室に十分な外光を取り込むために壁には上げ下げ窓が1mおきに設けられ、その上部を白い漆喰壁とし、下部には久留が好んだX状の装飾を施しているのも特徴。明治期らしい和洋折衷の仕立てです。

見どころは細部の意匠にも。正面出入口のガラス扉は鋳鉄で優美にデザインされ、床下換気口や扉の蝶番、廊下の下がり壁にみられる持送りには、学習院の校章である桜の文様があしらわれています。窓の鍵に刻まれた、愛らしいペンギンの姿にも注目です。

大戦時に学習院の多くの木造校舎が被災・焼失しましたが、この建物は危うく難を逃れました。空襲時、当直の教員による必死のバケツリレーで飛び火を消し止めたという話が伝わっています。竣工から110余年、図書の閲覧や貸し出しだけでなく、サロンコンサートや弁論大会など多様なイベントにも利用されてきたこの建物は、近年、耐震改修工事が完了。これからも歴史薫るキャンパスの象徴として愛され続けるに違いありません。



正面玄関ガラス扉の装飾(上)
窓の鍵のペンギン(下)



明治期の学校建築として貴重なこの建物は、国登録有形文化財に登録されている

取材協力:学習院大学史料館 学芸員 富田ゆり 写真提供:学習院大学史料館、学習院施設部